絵本の二つの潮流から幼年童話へ

ラーゲルレーヴ、瀬田貞二、松居直をつなぐ

町　田　り　ん

はじめに

本学紀要第28号の中で筆者は瀬田貞二の絵本の言葉について論じた。瀬田はハーバート・リードが童唄（わらべうた）に見出した「マジックアンドミュージック」に言及し、それを子どもが初めて出会う本である絵本の言葉に活かそうとつとめた。

「ある言葉は耳に快く響きますし、ある言葉は魔力を持ち心を神秘感（ワンダー）で満たします。マジックとミュージック、これが最良の詩には具わって、いっしょになって、特別な悦びを私たちに授けてくれます。」(1)

本論では、昨年に引き続き瀬田の仕事の背景を考察しながら、今日の、絵本隆盛の時代を築いた日本の作家や翻訳者、編集者をとりあげ、さらに絵本の先にある文学の沃野に子どもを導くための「幼年童話」について、スウェーデンの作家セルマ・ラーゲルレーヴ『ニルスのふしぎな旅』を紐解きながら掘り下げていく。

1　絵本の二つの潮流

絵本について瀬田貞二は、絵が物語る絵本は絵の方が強烈に作用して、文の働きがなくなり、意味の印象がなくなる場合があることを指摘している(2)。瀬田は画家の優れた絵と、吟味された作家の言葉が相互に良くつりあいながら幼い人たちの想像力を誘うことに心を砕いた。瀬田の再話による多くの昔話絵本はその系譜に位置する。詳しくは本学紀要第28号の拙稿を参照していただきたいが、瀬田による絵本の言葉は、リズムを損なわないよう注意深く編まれており、広い意味では、童唄（わらべうた）の領域に絵本の言葉をのせる工夫を凝らしていた。瀬田節と言われるほどの言葉のリズムは絵本を読んでもらった子どもがおとなになってからも読み手の声とともに子どもの心に根を下ろす。

瀬田の翻訳絵本は昔話が『三びきのやぎのがらがらどん』『おだんごぱん』『三びきのこぶた』『七わのからす』『ブレーメンの音楽隊』などがあり、創作では『おやすみなさいおつきさま』『げんきなマドレーヌ』『アンガスとあひる』『チムとゆうかんなせんちょうさん』などがある。

更に松居直は『絵本とは何か』のなかで、ロシアの絵本画家ラチョフの言葉をひきながら、絵本の絵と言葉について次のような視点を提示している。

「絵本画家は作家の書いていること、あるいは書いていなくても本の中で暗示されていることを原文から逸脱することなく再生する。すなわち物語の補足と発展こそが主要な課題である。」(3)

図１　『てぶくろ』ウクライナ民話　ラチョフ絵

図１に示す通り、雪の中に落とした手袋のなかに動物たちがどんどん入っていくという不思議なウクライナ民話の「絵による補足と発展」をラチョフは見事に実現している。本書は内田莉莎子の翻訳で1965年に日本から出版されて以来今日まで280万部のロングセラーを記録しており、幼い子とその親、幼児教育者から支持され読み継がれてきた。

一方モーリス・センダック、安野光雅、末盛千枝子らは絵が物語る絵本の隆盛に貢献した。絵本は子どもも大人も手にとる事ができる幅広いジャンルであることを、彼らは国際的に評価の高い絵本の数々を生み出しながら示していった。

モーリス・センダックは1963年に『かいじゅうたちのいるところ』で子どもの心の深層を絵だけで表現して今日までに全世界で2000万部を売り上げた。

図２　『かいじゅうたちのいるところ』センダック作絵

センダックは瀬田の述べる「マジックアンドミュージック」を言葉ではなく絵で表現した。絵本は主人公マックスの心の中の「マジックアンドミュージック」が増すにつれて画面は大きくなり、図３のような、文字のない見開きいっぱいの大画面が６ページにわたり繰り広げられる。

図３　『かいじゅうたちのいるところ』センダック作絵

マックスが思う存分かいじゅうたちと過ごし家に帰って行き、画面は徐々に小さくなる。最後の２ページは、絵は右ページのみで左ページには「いつのまにやら、…じぶんの　しんしつ。ちゃんと　ゆうごはんが　おいてあって」と言葉が入り、次ページは絵がなく、言葉のみ「まだほかほかと　あたたかかった」と記され、終わる。

『かいじゅうたちのいるところ』にみられるセンダックの絵本表現は、絵が独自に語り、言葉は絵の補足としての最小限の解説。そこがラチョフの「てぶくろ」とは根本的に異なるところだ。

このことは子どもの本における、絵本の二つの潮流を端的に表している。前者はラチョフの言葉を借りれば、幼い読者を理解し、かれらに愛情を持ち、絵をつける文学作品を尊重することで作られたものであるから、絵本から幼年童話、幼年童話から文学へ移行していくはじめの一歩として大きな存在意義がある。

一方後者は『かいじゅうたちのいるところ』における絵と文の関係だけではなく、あらゆる面で絵本そのものの芸術性が極めて高く、画面の進行や装丁の隅々まで気を配り作られている。末盛千枝子は自身が翻訳した『ピアノ調律師』の編集過程でのエピソードを『人生に大切なことはすべて絵本から教わった』の中で次のように述べている。

「この本のカバーをあけると表紙には、ピアノ調律師の道具が箔押しで表現されています。その作業は印刷屋さん泣かせで、こんなことやっぱり今の時代にはできないのかと思ったのですが、私が原本を見たときの大きな魅

力はこの表紙だったので、この表紙なしでこの本をつくるならば意味が無いとさえ思いました。…原本は素敵なのに日本語版になるとまったく違う装丁で出されていて、もったいない、と思うことがよくあります。実際本の魅力というのはその点ものすごく大きいはずで、私はこだわっております。」[(4)]

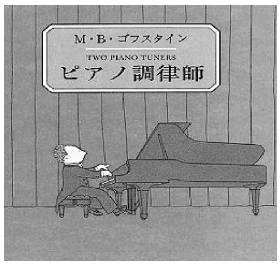

図４　『ピアノ調律師』ゴブスタイン作絵

今日の絵本のふたつの潮流は、前者、前者と後者を併せ持つ絵本、後者の絵本など多様な様相を呈し、双方相まって今日の隆盛をもたらしていると言えよう。筆者はこの二つの潮流は相反せず補い合うものと考える。両方兼ね備えている絵本としては、フェリクス・ホフマン『ねむりひめ』、Ｍ・Ｂ・ゴブスタイン『ゴールディーのお人形』などがあろう。

図５　『ねむりひめ』グリムの昔話　ホフマン絵　瀬田貞二訳

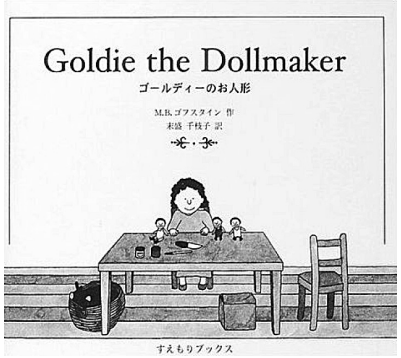

図６　『ゴールディーのお人形』ゴブスタイン作絵　末盛千枝子訳

2　幼年童話というジャンル

2012年、これまでにない企画による幼年童話が全六冊のうち四冊まで刊行された。セルマ・ラーゲルレーヴによる名作『ニルスのふしぎな旅』から選り抜きの六話を一冊ずつにまとめた『ニルスが出会った物語』である。対象年齢は小学校中学年とある。

『ニルスのふしぎな旅』は55章1000ページに及ぶ大作である。スウェーデンの自然と風土に子どもたちが誇りを持てるように、自国の地理や歴史を楽しみながら理解させる教科書として、スウェーデン政府が作家ラーゲルレーヴに依頼して1906年に完成した。物語の中心はニルスの成長物語だが、劇中劇のように伏線が多彩で以下の５種類に分けられ、色鮮やかな糸で織られたタペストリーのような物語である。

① 中心となるニルスとガチョウのモルテンの旅の物語
② ニルスと共に旅をする他の鳥たちの物語
③ 伏線となるガチョウ番の姉弟の物語
④ 随所に紹介されるスウェーデンの自然にまつわる伝説や昔話
⑤ 各地方の地誌と産業構造とそこで働く人々のエピソード

各章はそれぞれ独立した物語であり、更にその中にも物語が組み込まれ、読者はニルスとともにスウェーデンの様々な地方を旅しながら、人間の温かさや賢さ、またずるさや愚

かさに触れ、事件に巻き込まれながら乗り越えていく。本書は菱木晃子の翻訳で2006年に福音館書店より新訳が出版され、好評を博している。

魅力的な長編童話『ニルスのふしぎな旅』を、古典童話の重厚さに腰が引けてしまいそうな年齢層にも気軽に手にとってもらいたいとの意図をふまえ、同じ出版社より幼年童話『ニルスが出会った物語』がまとめられた。

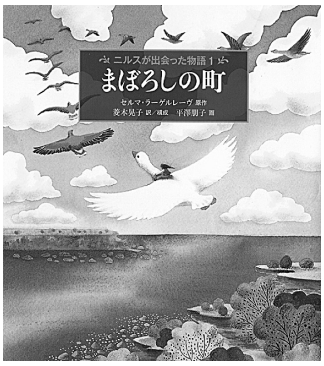

図７　『ニルスが出会った物語１まぼろしの町』
ラーゲルレーヴ作　菱木晃子訳

幼年童話について脇明子は『読む力は生きる力』のなかで、次のように問題提起している[5]。

「幼年童話にも黒い線だけのシンプルな挿絵ではなく、絵本のような絵をつければいいかというと、そういうことでは無いと思います。たしかに、こんな状況を反映してか、質の高い幼年童話にもカラーの絵をつける例が目立つようになっていますが、それでは「絵を見る」ことから「読む」ことへの移行を先送りするばかりではないでしょうか。」

『ニルスが出会った物語』シリーズは絵本になじんだ子どもたちにも、手に取って読んでもらえるよう、カラー刷りの幼年童話の形となっている。絵は美しく原作の雰囲気を損なうことは無い。脇の懸念を踏まえつつも、このシリーズは一つの試金石としての意義はあったのではないだろうか。

3　刊行の動機

スウェーデンにおけるラーゲルレーヴと日本における瀬田貞二・松居直の仕事

『ニルスのふしぎな旅』について、興味深いのはこの物語が誕生するきっかけである。当時スウェーデンは鉄鉱石やパルプの豊富な資源を背景に近代化を推し進め北欧の中心的国家としての草創期にあった。手に負えない悪童だったニルスが８ヶ月の旅を経て勇気と誇りと優しさを身につけていく成長物語のなかに、作者は国の未来を担う子どもに向け、全霊を傾けメッセージを送った。

同様に日本では第二次世界大戦後の復興を担う事になる子どもに向け、瀬田貞二は『児童百科事典』を編纂した。

筆者は昨年一昨年と続けて児童百科事典を研究対象としてきたが、児童百科事典の冒頭の「まえがき」は瀬田の意図を端的に表している一文である。「まえがき」を文脈に沿って要約すると以下のようになる[6]。

① フランスの科学者アンペールは幼少期に世界最初の百科全書を１ページ残らず読破し、将来の大発見の礎を築いた。
② 日本の突き当たっている困難な情勢や新たな問題が、考えようによってはフランス革命時のフランス国内の状況以上であること。
③ 教育の質の低下は学力を弱め新しい世界をつくる列から離れてしまうのではないか。
④ これまでの参考書や百科事典が若い人にとっては味気ないものだった。
⑤ もしここに若い人たちが偶然めくったページに読みふけってしまうほどのおもしろい百科事典があったらどうだろう。
⑥ 勉強のために引いた項目から、すぐさま好奇心をそそられ、志をよびさまされるほどの、たのしい百科事典があったらどうだろう。
⑦ ⑤⑥のような望みにかられて児童百科事典の編纂を企画した。

⑧ 読書は習慣である。若い人たちに知識を求める心があり、新しい世界を感ずる好奇の眼があるかぎり、おもしろく、たのしい記述は、かならず読書の習慣を養うはずだ。
⑨ 児童百科事典はやさしい話から知識へ、身近な事柄から深い道理へ、応用から原理へ、読む事から考える事へのかけ橋でなければならない。
⑩ この辞典の全巻の特色。
⑴ 学問の正確さと視野の広さとを保つこと。
⑵ 問題をいきいきと、まざまざと表すこと。
⑶ しかも中心を直接ついて簡明であること。
⑪ 今まで最もないがしろにされてきた中学生（12〜15歳）の読み物として編纂した。項目の程度によって小学上級、高校下級生にも読まれるように工夫した。
⑫ 日本を知り、日本を愛する小国民のための辞典。
世界の中に日本を正しく位置づけ、日本の特別な伝統を振り返る観点も盛り込む。

ラーゲルレーヴが『ニルスのふしぎな旅』を記した1906年と、瀬田が『児童百科事典』を編纂した1951年には45年の開きがあり、国が抱える状況も異なる。しかし子どもの本に関わる者が、次世代を担う子どもに向け、何を手渡すべきかという点で、両者には共通する願いがあり、ラーゲルレーヴも瀬田もその仕事に打ち込んだ。

瀬田による児童百科事典の刊行開始から10年後の1961年、福音館書店の松居直は月刊絵本「こどものとも」を創刊する。ここから瀬田は「こどものとも」の仕事のなかで、優れた翻訳絵本を次々と生み出していくことになる。

松居は児童文学者いぬいとみこの紹介で瀬田と出会い、瀬田が絵本と子どもの文学に深い造詣を持つ人物であることを知る。松居は瀬田にすすめられ、外国の優れた絵本の原書をとりよせた。それらの原書を読むことによって絵本編集の考えがまとまっていったという[7]。

松居は創刊から150号まで直接編集に関わり、今日まで続く月刊絵本「こどものとも」の礎を築いた。

4　昔話をどう活かすか

時代も国も異なるラーゲルレーヴ『ニルスの不思議な旅』、瀬田貞二『児童百科事典』、松居直「こどものとも」の仕事だが、三者には共通しているものが幾つかある。その一つが「昔話」を豊富に取り入れている点だ。

リリアン・スミスは『児童文学論』第四章昔話のなかで、アニー・E・ムアの児童文学史から昔話について次のように引用している。

「物語の構成、劇的要素、一貫した調子、性格描写、テーマの明確さ、力強い動き、効果的な会話など、昔話の最良のものは、もっと技巧を凝らした文学の持つ錯雑さに煩わされることなく、驚くべき力強さを示し、長い間子どもの特別な財産になってきた。」[8]

スミスは更に、昔話から子どもが何かを得るためには、物語を生んだ国の文化と環境の特徴が、話の中に感じられることが大切だと述べる。

『ニルスのふしぎな旅』には各地の伝説が10編ほど紹介されている。第37章「ストックホルム」はメーラレン湖とバルト海の境に位置する４つの中洲が国の首都となった経緯を、国王である老紳士が市井の老人に語る形となっている。アザラシたちが海の乙女となって中洲に上がったところを、一人の漁師が目撃してアザラシの皮を隠し、元の姿に戻れなくなった娘を妻にする。世界中に存在する羽衣伝説に起原をもつ物語だ[9]。

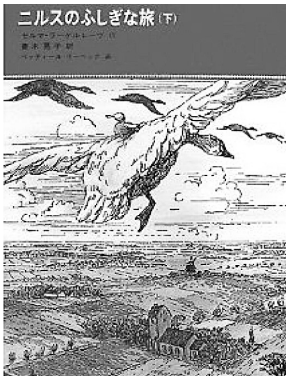

図 8『ニルスのふしぎな旅（下）』ラーゲルレーヴ作

一方瀬田は『児童百科事典』の中で、世界の昔話について以下の８つの象徴的な昔話の紹介に多くのページを費やした。その内容は話そのものの紹介にとどまらず、学説を紐解きながらも、難しい言葉を使わず、できる限り沢山の類話を紹介し、解りやすい解説に心を砕いている。瀬田は中学生から高校生が面白く読めるように、ここでも努力を払っていた[10]。

①　カエルの王子

グリムの第一話。王女が金の鞠を井戸に落としてしまいカエルに拾ってもらう代わりにカエルの願いを聞き入れる。ヨーロッパには50種以上類話が存在している。日本では「ツブの婿入り」「一寸法師」「桃太郎」等がある。

②　美女とけもの

人間でないものと結婚し、困難を乗り越え魔法を解く娘の話。フランスでは、商人の末娘が父の約束を守るために野獣と結婚する。イタリアでは「プシケとクビト（愛の神）」北ヨーロッパには貧しい百姓の末娘と白クマの話。日本には「古事記 イクタマヨリ姫と神」や、動物に助けられた親が娘を嫁にやる約束をする話がある。

③　夢買い長者

寝ている間に魂が虫などになって鼻の穴や口から抜け出し、本人は夢で不思議な体験をする。日本、ロシア、モンゴルなどに類話がある。

④　三人兄弟

兄弟譚、東北地方には、三兄弟が運を試しに旅に出て下の二人は立派な侍になり太郎は山姥の所で人形を一体貰っただけだったが人形が太郎を助け父の跡継ぎとなる。グリム「四人兄弟」ロシア「イワンのばか」等世界中に類話が多数存在。

⑤　花咲じい

犬の恩返し話。江戸時代滝沢馬琴『燕石集志』で定着。中国や奄美大島では兄弟の確執話。室町時代御伽草子「福富草紙」へっぴりじいさん。アイヌ「ペナンペ、パナンペ」等がある。

⑥　灰かぶり

継子いじめを克服し幸せな結婚を勝ち取る話。ペロー「シンデレラ」、日本「米福糠福」、平安時代「落窪物語」、御伽草子「鉢かつぎ」等。

⑦　かちかち山

ずるい性悪な動物をこらしめる話。日本各地に類話が存在。東北地方「兎と熊」熊が背負った薪がもえると兎は「かちかち鳥」と答える。岡山「牛方山姥」火打石の音を「カチカチ鳥が鳴き出した」火が燃えると「どんどん鳥が鳴きだした」インドや中国にも類話がある。

⑧　王様と小僧

王様と羊飼いや家来、殿様と百姓等、王の命令で難問を解いて、若者が危機を脱し運を手に入れる話。ヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカ等世界中に口伝や文献が数百存在する。

『児童百科事典』のなかで、昔話に関して、瀬田は比較的自由に８つの項目を設定し類話の紹介をしていた。はからずも瀬田は、その後松居直と共に作り上げていく海外の優れた昔話絵本の出版と翻訳に向けての土台作りを、この仕事を通しておこなっていたとも言えよう。

その後瀬田と共に、瀬田の仕事を全面的に後押しした松居直は「こどものとも」や他の絵本を通し数多くの昔話絵本を世に送り出していった。松居は、昔話は原作の吟味が不可

欠であると述べ、リリアン・スミスの「昔話が生まれた場所の雰囲気をきちんと出す」ことを忠実に守りながら絵本を作り、次のように述べている。

「私は、昔話を子どもに与える場合には、民族遺産だからということよりも、もっと前に、その作品が本当に文学的に価値があるかどうか、子どもの文学としてそのことを考えるべきではないかと思っています。」(11)

松居はその言葉の通り、日本のみならず、世界中の昔話を選りすぐり、それらを子どものもとに届け、子どもたちに多様な文化の存在を耳と目から感じとってもらうよう努めてきた。そこにはアジア・アフリカ諸国のマイノリティの国々も数多く含まれる。

5　まとめ

本稿では、今日の子どもの本における絵本に、二つの潮流が存在することを明らかにし、その中に瀬田貞二の仕事を位置づけた。また絵本から文学に子どもを導くために、福音館書店が古典童話を「幼年童話」として分冊して出版するという新しい試みを、ラーゲルレーヴ『ニルスのふしぎな旅』で行ったことは評価に値する。幼年童話を重視していくことは、今日の子どもの読書の充実に不可欠である。子どもの反応と合わせて更なる模索を期待したい。さらに国が戦争や災害がひきおこす経済危機などの難局にあって、人々が次世代の子どもの教育に真摯に向き合うとき、子どもの本に様々な潮流が生まれることが、ラーゲルレーヴと瀬田貞二、松居直の仕事から浮き彫りにされた。合わせて三年目となる瀬田の『児童百科事典』の解析を、昔話の項目で僅かだが進めることが出来たのは幸いであった。

（1）　瀬田貞二『幼い子の文学』中央公論社、1980年、60頁

（2）　瀬田貞二『絵本論』福音館書店、1985年、367～368頁

（3）　松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部、1973年、109頁

（4）　末盛千枝子『人生に大切なことはすべて絵本から教わった』現代企画社、2010年、35頁

（5）　脇明子『読む力は生きる力』岩波書店、2005年、87～88頁

（6）　瀬田貞二『児童百科事典１』まえがき、平凡社、1951年

（7）　松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部、1973年、250頁

（8）　リリアン・H・スミス『児童文学論』石井桃子、瀬田貞二、渡辺茂男 共訳、岩波書店、1964年、79頁

（9）　セルマ・ラーゲルレーヴ『ニルスのふしぎな旅（下）』菱木晃子訳　ベティール・リーベック絵、福音館書店、2007年、185～192頁

(10) 瀬田貞二『児童百科事典』、平凡社、1951年　昔話の項目

① かえるの王子『児童百科事典４』、200～202頁
② 美女とけもの『児童百科事典18』、196～198頁
③ 夢買い長者　『児童百科事典22』、220～221頁
④ 三人兄弟　　『児童百科事典９』、254～255頁
⑤ 花咲じじ　　『児童百科事典18』、9～11頁
⑥ 灰かぶり　　『児童百科事典17』、200～201頁
⑦ かちかち山　『児童百科事典５』、31～33頁
　王様と小僧　『児童百科事典３』、220～221頁

(11)　松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部、1973年、272頁

掲載図書一覧

『ニルスのふしぎな旅』（上）（下）セルマ・ラーゲルレーヴ作、菱木晃子訳、福音館書店、2007年

『ニルスの出会った物語』セルマ・ラーゲルレーヴ作、菱木晃子訳、福音館書店、2012年

『三びきのやぎのがらがらどん』アスビョルンセンとモー再話、マーシャ・ブラウン絵、瀬田貞二訳、福音館書店、1965年

『おだんごぱん』ロシアの昔話、瀬田貞二訳、脇田和絵、福音館書店、1966年

『おおかみと七ひきのこやぎ』グリムの昔話、瀬田貞二訳、福音館書店、1967年

『三びきのこぶた』イギリスの昔話、瀬田貞二訳、山田三郎絵、福音館書店、1967年

『七わのからす』グリムの昔話、瀬田貞二訳、福音館書店、1971年

『ブレーメンの音楽隊』グリムの昔話、ハンス・フィッ

シャー絵、瀬田貞二訳、福音館書店、2000年
『おやすみなさいおつきさま』マーガレット・ワイズブラウン作絵、瀬田貞二訳、評論社、1979年
『げんきなマドレーヌ』ベーメルマンス作絵、瀬田貞二訳、福音館書店、1972年
『アンガスとあひる』マージョリー・フラック作絵、瀬田貞二訳、福音館書店、1974年
『チムとゆうかんなせんちょうさん』アーディゾーニ作絵、瀬田貞二訳、福音館書店、1963年
『てぶくろ』ウクライナ民話、内田莉莎子訳、福音館書店、1965年
『かいじゅうたちのいるところ』モーリス・センダック作絵、じんぐうてるお訳、冨山房、1982年
『ピアノ調律師』ゴブスタイン作絵、末盛千枝子訳、現代企画社、2012年
『ねむりひめ』グリムの昔話、瀬田貞二訳、福音館書店、1963年
『ゴールディのお人形』ゴブスタイン作、末盛千枝子訳、すえもりブックス、2003年